

中学校弁論大会 2026.2.20

この日、恒例の中学校弁論大会が開かれました。

弁論に取り組むと、「世の中」の課題やその解決策を自分なりに考えて論を組み立てる中で論理的思考力が磨かれ、また発表によって表現力も磨かれます。一方弁論を聴く側も立場の違いを受け止め、いろいろな考え方を知って視野を広めることができ、論ずる側も聴く側も成長できます。このような教育的意義を踏まえ、本校では毎年 3 学期に弁論大会を開いています。あわせて、本校の教育方針の一つである隣人愛の精神に基づき、助け合う気持ちや、社会奉仕の大切さを再認識する機会としても、私たちはこの弁論大会を重視しています。

2 学期の終わりに各学年でガイダンスを行い「弁論とはどんなもので、話をどう組み立てるか」などを伝えました。さらに学年によってはお手本になるような内外の弁論を紹介した上で、冬休みの宿題の一つとして、中学生全員が 400 字詰め原稿用紙で 4 枚程度の弁論の原稿作りに取り組みました。

3 学期に入るとロングホームルームの時間や終礼の時間などを利用して、生徒たちはお互いに書いたものを読んだり発表を聴いたりして、長い時間をかけてクラス代表を 1 名選びました。内容はもとより、その話し方や説得力、4 分という制限時間の使い方など、選ぶポイントはいろいろありますので、その中でクラス代表に選ばれるのは、とても名誉なことです。

当日はヨセフホールに中学生全員が集まり、中学 3 学年・合計 12 クラスの代表が登壇して弁論を披露します。審査に当たるのは各クラスから 1 名ずつ選ばれた生徒と数名の教員です。弁士はそれぞれ、自分の体験や趣味など身近なところから話を始め、社会や世界の問題に論を展開しました。論点は近い人間関係から世界のあり方まで多岐にわたり、弁士の問題意識、素材の選び方、論の立て方などそれぞれに聴きどころがあり、表現にもそれぞれの工夫が強く感じられました。500 名近い全校生徒の前で発表することはなかなか勇気のいることですが、12 名の代表はそれぞれ堂々と弁論を展開しました。弁論を聴く生徒の態度も素晴らしく、最後の弁士の発表まで集中力を切らさず熱心に耳を傾け、発表が終わるたびに弁士に大きな拍手を贈りました。

今年の弁論大会に臨んで、弁論はことばの花束だと改めて感じました。その花束を一生懸命作り、多くの聴衆に届けてくれた 12 名の代表に改めて敬意を表したいと思います。また代表以外の生徒たちも、自ら弁論を組み立て、友の弁論に耳を傾ける経験を通じて、確実に成長できたと思います。



上左 大会開始直前の様子 上右 審査員の生徒・教員(大会開始前に撮影)

下左 大会の進行にあたる文化委員 下右 優勝生徒の弁論の様子